

鶴松遺跡 Ⅸ

（主）浜北袋井線県単交通安全施設
１種工事に伴う発掘調査報告書

１９９８．３

静岡県袋井市教育委員会
静岡県袋井土木事務所

鶴松遺跡 Ⅸ

（第９次調査）

１９９８．３

静岡県袋井市教育委員会
静岡県袋井土木事務所

例　　言

1．本報告書は平成８(1996)年10月25日～平成９(1997)年３月20日の期間に、袋井市延久、山科地内で、歩道新設・排水溝施工工事に伴い実施した鶴松（つるまつ）遺跡発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、静岡県袋井土木事務所長　高木輝章を委託者として、袋井市長　豊田舜次を受託者とし、袋井市教育委員会が発掘調査を実施した。

3．平成８年度の鶴松遺跡発掘調査（第９次調査）は、永井義博（袋井市教育委員会）が担当した。

4．平成９年度の資料整理・発掘調査報告書作成も永井が担当した。

5．本事業における袋井土木事務所の担当は五島克巳氏（工事第１課第１係）である。事業遂行にあたっては全面的な協力を得た。ここに記して感謝いたします。

6．鶴松遺跡における今までの発掘調査をまとめると次のとおりになる。

発掘調査	調査年度	発　掘　調　査　の　原　因	調査担当者
第１次調査	昭和47年(1972)	袋井土木事務所による県道浜北袋井線拡幅工事	川井正一
第２次調査	昭和57年(1982)	電信電話公社（当時）山科無線塔建設工事	永井義博
第３次調査	昭和57年(1982)	中部電力による地下高圧ケーブル埋設工事	松井一明
第４次調査	平成２年(1990)	延久地区農村基盤総合整備に伴う工事	吉岡伸夫
第５次調査	平成３年(1991)	㈱ジュピタによる個人住宅の建設工事	松井一明
第６次調査	平成３年(1991)	袋井土木事務所による県道浜北袋井線歩道設置工事	永井義博
第７次調査	平成３年(1991)	中部電力による送電線鉄塔建設工事	松井一明
第８次調査	平成８年(1996)	永井宏親氏による集合住宅建設工事	永井義博
第９次調査	平成８年(1996)	袋井土木事務所による(主)浜北袋井線改良工事	永井義博

7．発掘調査に関する事務はすべて袋井市教育委員会生涯学習課職員がおこなった。

8．発掘資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。

目　　次

第１章　発掘調査に至る経過……1
第２章　調査の経過……1
第３章　調査体制……2
第４章　調査の方法……2
第５章　歴史的環境……3
第６章　遺　　構……4
第７章　遺　　物……4
第８章　まとめにかえて……7
　　報告書抄録……8

表　目　次

第１表　鶴松遺跡Ⅸ出土土器一覧表……5・6

挿　図　目　次

第１図　鶴松遺跡位置図（1／50,000）
第２図　鶴松遺跡発掘調査の位置（1／2,500）
第３図　旧地形でみる鶴松遺跡の位置（陸地測量部地図より）
第４図　太田川・原野谷川流域の地形・地質図（加藤1985より）
第５図　鶴松遺跡周辺の地形・地質図（加藤1985より）
第６図　発掘調査区全体図（北・南地区）
第７図　出土遺物実測図（１～14＝００１）
第８図　出土遺物実測図（15～22＝００１）
第９図　出土遺物実測図（23・24＝００２、25～28＝００３）
第10図　出土遺物実測図（29～40＝００４）
第11図　出土遺物実測図（41～43＝００５、44＝焼土住居跡、45～49＝耕作土下層）

写 真 図 版 目 次

図版１
(1) 調査完了写真（東より）

図版２
(1) 発掘調査前の状況（西より）
(2) 調査前の土側溝の状況

図版３
(1) 発掘調査完了写真（西より）
(2) 発掘調査完了写真（東より）

図版４
(1) 発掘作業の状況（焼土住居跡付近）
(2) 発掘作業の状況（溝跡００１付近）

図版５
(1) 溝跡００１完掘写真（東より）
(2) 溝跡００２完掘写真（東より）

図版６
(1) 溝跡・柱穴跡の完掘写真（東より）
(2) 溝跡・柱穴跡の完掘写真（西より）

図版７
(1) 住居跡（部分）の完掘写真
(2) 焼土の検出状況

図版８
(1) 土器出土状況（００４）
(2) 土器出土状況（００４）

図版９
(1) 土器出土状況（００３）
(2) 土器出土状況（００５）

図版10
(1) 北地区の発掘調査前の状況（東より）
(2) 北地区・発掘調査開始（東より）

図版11
(1) 北地区完掘写真（西より）
(2) 北地区完掘写真（東より）

図版12
(1)　工事排土内の土器確認作業
(2)　工事排土内の土器確認作業

図版13
鶴松遺跡出土土器（1・2・3）

図版14
鶴松遺跡出土土器（4・5・6）

図版15
鶴松遺跡出土土器（7・8・10）

図版16
鶴松遺跡出土土器（11・12・14）

図版17
鶴松遺跡出土土器（15・16・19）

図版18
鶴松遺跡出土土器（20・21・22）

図版19
鶴松遺跡出土土器（25・26・29）

図版20
鶴松遺跡出土土器（31・32・33）

図版21
鶴松遺跡出土土器（34・35・36）

図版22
鶴松遺跡出土土器（37・38・39）

図版23
鶴松遺跡出土土器（40・41・42）

図版24
鶴松遺跡出土土器（46・48・49）

第１章　　調査に至る経過

平成８年４月30日午後２時ころ、袋井市山科地内のアパート建設予定地の発掘調査の打合せのため「鶴松遺跡」を訪れた市職員の目の前では、県道の用排水溝設置工事が行われ多数の土器片が道路に散乱していた。そこで市職員はただちに現場の建設会社作業員より工事概要を聴取するとともに、関係機関に工事の中止を連絡した。直ちに工事は中断されたが、用排水溝予定地約100ｍのうち約80ｍがすでに掘削されてしまっていた。

この「鶴松遺跡」とは、弥生時代後期の「菊川式土器」のセットを出土する太田川流域の中核集落遺跡で、静岡県史や専門の概説書にもたひたび登場する著名な遺跡である。過去の発掘調査ではさらに古い弥生時代中期の遺構・遺物も検出され袋井市内で最初に稲作が行われた「袋井の農業の発祥の地」とも考えられている。遺跡内での発掘調査もすでに８回行われており地元でもよく知られた遺跡の１つで、県道脇には市教委により鶴松遺跡の文化財説明板が設置され埋蔵文化財保護のＰＲがされている重要遺跡の１つである。

さて、協議の結果、平成８年５月８日付けで袋井土木事務所長名で文化庁長官宛て「埋蔵文化財発掘の通知について」が提出され、これに対して周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知が静岡県教育委員会教育長より袋井土木事務所長あて送付され、正式に工事着手前の発掘調査が指示された。そして、平成８年10月には袋井市長　豊田舜次と静岡県袋井土木事務所長　高木輝章氏との間で「埋蔵文化財に関する協定書」と「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」が締結され鶴松遺跡の調査が開始されることとなった。

第２章　　調 査 の 経 過

平成８年10月25日　発掘調査委託契約書の締結。
11月28日　工事によって搬出され空き地に積み上げられた土より出土土器を回収する。
平成９年１月10日　連絡用自動車のレンタルを開始する。
１月14日　現場用コンテナハウス・仮設トイレのリースを開始する。
１月16日　五光建設により安全管理施設（バリケード等）が設置される。
１月17日　発掘器材を現場へ搬入する。発掘作業の開始。
１月22日　調査員出張のため現場は休み。
１月23日～24日　用水路のなかの発掘作業が続く。
１月27日　遺構確認作業。住居跡・柱穴跡などが検出される。
１月28日　遺構確認作業。砂利層を確認して旧河川の流路と思われる。
１月29日　遺構を掘り始める。土器が大量に出土する。
１月30日　出土状況の写真撮影と実測作業。
１月31日　県道南側の完了写真を撮影してこの部分の調査完了。
２月４日～５日　県道北側の調査のため㈱フジヤマ前を五光建設が掘削する。
２月６日　発掘作業。土器の出土と遺構の写真撮影。実測作業の後調査を完了する。
２月７日～３月19日　出土品資料整理・発掘調査報告書の作成準備作業。
平成９年３月20日　委託契約完了日。

第3章　調査体制

調査計画　静岡県袋井土木事務所
調査受託　袋井市長　豊田舜次
調査実施機関　袋井市教育委員会
教育長　浅井通男
教育次長　前田富美雄
生涯学習課長　鈴木雅実（平成8年度）　小粥保夫（平成9年度）
文化財係長　吉岡伸夫
主査　永井義博
主任学芸員　松井一明　森井雅彦
学芸員　白澤崇
経理事務　鈴木寿美子
調査参加者　大庭嘉平　鈴木定雄　佐藤好孝　武市正一　増田治平
川島良一　山下悦子　大庭京子　高木啓子

第4章　調査方法

今回の発掘調査は、県道南側の袋井市山科地内では袋井浜北線脇の土側溝を改良してコンクリートのU字溝を設置する工事のための事前調査で、ここは誤って予定工区100ｍのうち工事のためすでに80ｍは掘削されていた。しかし、80ｍの掘削部分を詳しく観察すると、U字溝を埋設する深さのみの掘削であるため遺跡の包含層の下層の半分は無傷で残っていた。調査は作業員の手作業により溝の幅で遺物包含層の土を掘下げながら遺構確認の精査を行っていくと、ただちに溝跡や柱穴跡が確認できた。また、鶴松遺跡は同一の確認面ですべての時代の遺構が一度に検出されるので、遺構内の覆土の違いによってもある程度の時代を把握することができる。県道北側の袋井市延久地内の現場は五光建設の重機により掘削をした後に作業員により発掘調査を実施した。ここは、平成3年の県道の歩道設置工事に伴う発掘調査でこの区間の東西の調査は終了していた。狭くて、流水もあり遺構検出に手間取ったが以前のデータを参考にしてなんとか短期間で調査を終了することができた。

排水作業は現場に電灯線を引けなかったため小型2インチポンプを設置して、降雨時のみ発電機を回して排水作業を行った。この時期にしては比較的好天が続いて助かったが、ある雨天の日の翌日は遺跡内はプールとなりバケツ・ヒシャクを使っての排水作業もあった。遺跡の写真撮影については、予算を押さえた現場のためラジコンヘリコプターによる空中写真測量が使用できず、調査員の手作業により実測を行った。遺構平面図は20分の1の図を基本として、土器の集中出土地点については10分の1の詳細図を作成した。レベル等については道路工事のために運ばれたベンチマークが近くにあったためこれを使用した。遺構・遺物の写真撮影は、中型カメラ（アサヒペンタックス6×7）1台と、小型カメラ（ニコンF401等）2台を使用した。使用フィルムはモノクロフィルムは富士写真フィルム株式会社のネオパンSSを使用し、リヴァーサルフィルムも同じく富士写真フィルム株式会社のフジクローム100デイライトフィルムを使用した。また、現場のスナップ写真としての調査状況報告のためポラロイドのジョイカムを使用した。

第５章　　地理的歴史的環境

１．はじめに

太田川中流域の遺跡の成り立ちについては「鶴松遺跡」「土橋遺跡」「鶴田Ⅱ遺跡」「堀越ジョウヤマ遺跡」等の多くの報告書がこれを解説している。そのため、本文ではその詳細については触れないが、ここでは今までのいくつかの調査例からその概要のみを記したい。

２．旧流路の両側に散在する微高地

静岡大学名誉教授の加藤芳朗氏は太田川流域の地質調査をまとめた「土橋遺跡」の報告書の中で、鶴松遺跡については、太田川左岸の後背湿地の中にあり（途中略）その立地条件をさぐるべく調査を行った結果、袋井市内の山梨～田中～鶴松～徳光～西別所～土橋と続く太田川からの旧流路を中心として立地していると記している（加藤1985『土橋遺跡　基礎資料編』袋井市教育委員会他）。

３．稲作のムラの盛衰

弥生時代中期から古墳時代にかけての太田川中流域の独特の地形・地質という舞台の上で、当時の人々はどんなくらしをしていたのであろうか。肥沃な平野という特性は、ここに住む弥生人・古墳時代の人々の生活に余裕を与えていたと考えることができる。ただし、それがすべて個人の手元に残ったこととは別であるが各ムラごとにかなりの生産量が予想できる。

さて、鶴松のムラでは弥生時代の中期中葉ころから人々の営みが開始されたことが今までの発掘調査の結果からわかっている。もちろん鶴松のムラの生産基盤は水稲耕作であり、それをなくしてはここにムラの成立する要因を見付けることはできない。弥生時代にここで生活を始めた人々は基本的には在地のいわゆる縄文人たちではなく、稲作技術を持って西からやってきた移民たちであったと考えられる。彼らが、移ってきた沖積平野の微高地は縄文時代から主に採集生活で暮らしてきた在地の人々にとっては重要な場所ではなく、当初は移り住んだ人々の住み分けがなされていた可能性がある。そして、時間の経過とともに生産量の低い在地の人々が吸収されていったと見るのが一般的かもしれない。この稲作技術を持った移民たちが基本的にどのルートを通って太田川流域までたどりついたか確定した事実は分からないが、浜名湖北岸から浜北～天竜～豊岡と伝ってきたと推測できる。

４．「親村」と「子村」

さて、鶴松のムラで萌芽した太田川中流域の稲作文化は、その豊かな生産力を背景に人工増加を産みさらには生産力の増加を見せて可耕地の拡大を進めていった。そのためには水源の確保が大切になってくる。またその水源から田に水を引くための灌漑や余った水を流す排水路の整備も行われ母なるムラとして様相を整えていったと考えられる。しばらくのあいだは、この肥沃な平野は弥生人たちの暮らしを支えてきたが、さらなる人工増加は徐々に食糧不足を起こし、弥生時代後期の前葉から新たな可耕地を求めて河川の下流域にムラの膨張が開始された。ここに鶴松遺跡を「親村」として南へは「徳光遺跡」→「土橋遺跡」→「玉越遺跡」と太田川の旧流路が形成した自然堤防上とその後背湿地の中に島状に浮かぶ微高地を求めて必然的に新たな「子村」を生み出していったのである。

これらのグループの中では鶴松のムラが分水管理で指導的役割を果たすが、このころはまだあくまでも鶴松のムラが支配的立場と考えるより同じグループの先駆者として後発の村の育成をする立場であったと考えたい。ところが、鶴松より上流域でも川田遺跡～鶴田Ⅰ遺跡～鶴田Ⅱ遺跡と展開する宇刈川流域の小さな河川と谷水に頼る耕作がはじまってくる。これらは、時代が下がって土木技術の開発により今まで水田開発の不可能であった地域まで開墾することができるようになったと見たい。

第６章　　遺　　構

今回の発掘調査は道路脇にコンクリートＵ字溝を埋設する工事に伴うもので、県道の南側の調査区は全長約100ｍ×幅60cm（掘削幅は発掘の都合により１ｍを確保する）の約100㎡の長大な調査区で、ちょうど鶴松遺跡の中心部を東西に貫くトレンチを設定したような状況であった。また、この調査区は平成３年に実施された県道北側の歩道設置に伴う発掘調査区と平行しており、この時の遺構・遺物の関連が注目された。

また、県道北側の調査区は平成３年の発掘調査で残った㈱フジヤマ袋井営業所前の全長約10ｍ、幅約１ｍの未施工の区間であった。ここは、県道の南側の調査を完了した後に取り掛かることとした。

まず現地・鶴松遺跡の標準的な土層は次のとおりである。

第１層＝水田耕作土

第２層＝水田の床土

第３層＝黒褐色土（薄い遺物包含層であるが場所によっては検出できない）

第４層＝茶褐色土（第３層と第５層の漸移層であり確定した地層ではない）

第５層＝黄褐色土または礫層（いわゆる地山。無遺物層）

しかし、水田耕作土も遺物包含層を開墾して作られており弥生土器の小破片は地表面にても確認できるため、発掘調査では水田床土を除去した段階で黄褐色土に黒色土の詰まった遺構が簡単に検出することができる。本報告では、検出された遺構の中でも代表的なものを紹介する。

溝跡００１は南地区の一番西端にて検出された溝跡である。幅１ｍのトレンチの中での検出であるので全長を知ることはできないが幅約２ｍ、深さ１ｍで大量の弥生土器をその覆土の中に包蔵している。溝跡００２は００１より東に約15ｍの位置で確認された溝跡でここからも大量の土器が出土している。遺構は幅約２ｍ、深さ１ｍで２本の溝跡が重複していることが土層断面よりわかる。遺構００３・００４は遺物を集中して出土する浅い落ち込みで住居跡の一部と考えることがてきる。この付近は埋設工事で一部攪乱を受けている。溝跡００５は南地区の市場か東側より検出された比較的規模の大きな溝跡で溝跡００１と同規模の遺構と考えられる。遺構は幅約２ｍ、深さ１ｍでいままで紹介した溝跡と同じく遺物を大量に埋蔵している。その他、小さな溝跡やピット群も検出されたが、調査範囲が狭いため遺構の全容を知ることはできなかった。

第７章　　遺　　物

今回の報告書では第７図～11図に図化した溝跡の遺物を中心に概略のみを一覧表で紹介した。溝跡００１の土器は、遺構が埋没途中に短期間に投入された遺物であるため、土器の一括性は高いように思われる。溝跡００１、００２、００５は昭和57年度のＮＴＴ関連発掘の溝跡群や、平成３度の県道北側の歩道設置工事に伴う発掘調査で検出された溝跡に対応するため、その時の遺物との対比が必要になってくる。これらについては本報告書では紙面の関係で解説できないが別の機会を得て詳細を報告したい。

第１表　　鶴松遺跡（Ⅸ）　出土土器一覧表（その１）

（単位：cm）

遺物ナンバー	挿図ナンバー	図版ナンバー	出土遺構名 出土層位名	器高 ( )現存高	口径 ( )は復元	胴部最大 ( )は復元	底径 ( )は復元	備考
1	7	13	溝跡００１	(12.0)	19.8	——	——	壺（頸部）
2	7	13	溝跡００１	(11.0)	18.0	——	——	〃
3	7	13	溝跡００１	(12.0)	17.4	——	——	〃
4	7	14	溝跡００１	(9.6)	14.6	——	——	〃
5	7	14	溝跡００１	(9.8)	——	——	——	〃
6	7	14	溝跡００１	(9.6)	16.4	——	——	〃
7	7	15	溝跡００１	(9.0)	8.4	——	——	〃
8	7	15	溝跡００１	(5.0)	——	——	6.4	壺（底部）
9	7	—	溝跡００１	(4.0)	——	——	5.0	〃
10	7	15	溝跡００１	(6.0)	——	——	7.4	〃
11	7	16	溝跡００１	(18.0)	12.0	——	——	壺
12	7	16	溝跡００１	(9.6)	8.0	——	——	細頸壺
13	7	—	溝跡００１	(8.0)	12.4	13.2	——	広口短頸壺
14	7	16	溝跡００１	(15.8)	14.6	16.0	——	広口壺
15	8	17	溝跡００１	28.5	14.6	25.0	6.2	壺
16	8	17	溝跡００１	19.8	24.6	——	12.2	高坏
17	8	—	溝跡００１	(10.0)	16.8	17.8	——	台付甕
18	8	—	溝跡００１	(19.0)	21.0	22.8	——	〃
19	8	17	溝跡００１	21.6	14.5	16.0	7.4	〃
20	8	18	溝跡００１	(9.0)	——	——	8.6	台付甕（台部）
21	8	18	溝跡００１	(9.0)	——	——	8.0	〃
22	8	18	溝跡００１	(7.6)	——	——	8.0	〃
23	9	—	溝跡００２	(13.0)	(9.0)	——	——	細頸壺
24	9	—	溝跡００２	(5.0)	(26.0)	——	——	甕
25	9	19	遺構００３	(11.2)	15.0	——	——	壺
26	9	19	遺構００３	(19.6)	25.0	22.6	——	台付甕
27	9	—	遺構００３	10.0	——	——	13.8	台付甕（台部）
28	9	—	遺構００３	10.0	——	——	11.4	高坏脚

鶴松遺跡（Ⅸ）　出土土器一覧表（その２）

（単位：cm）

遺物ナンバー	挿図ナンバー	図版ナンバー	出土遺構名 出土層位名	器高 ( )現存高	口径 ( )は復元	胴部最大 ( )は復元	底径 ( )は復元	備考
29	10	19	遺構００４	20.1	9.6	13.4	5.2	細頸壺
30	10	—	遺構００４	(7.3)	7.6	——	——	〃
31	10	20	遺構００４	(22.0)	7.6	15.8	——	〃
32	10	20	遺構００４	(14.0)	——	16.3	——	〃
33	10	20	遺構００４	(12.7)	——	16.0	4.2	〃
34	10	21	遺構００４	(9.2)	——	10.0	4.0	小型壺
35	10	21	遺構００４	(7.0)	——	——	8.0	高坏脚
36	10	21	遺構００４	(12.0)	29.8	——	——	高坏
37	10	22	遺構００４	(27.4)	27.6	26.0	——	台付甕
38	10	22	遺構００４	17.2	15.2	14.0	6.0	〃
39	10	22	遺構００４	(7.6)	——	——	9.0	〃
40	10	23	遺構００４	(17.6)	21.6	22.6	——	〃
41	11	23	溝跡００５	14.5	12.4	15.8	5.6	壺
42	11	23	溝跡００５	(20.0)	24.8	24.4	——	台付甕
43	11	—	溝跡００５	(7.4)	——	——	10.4	〃
44	11	—	焼土住居跡	(6.0)	——	——	——	壺
45	11	—	耕作土下層	(8.6)	8.6	——	——	細頸壺
46	11	24	耕作土下層	(8.6)	12.0	——	——	〃
47	11	—	耕作土下層	(8.4)	17.8	18.6	——	台付甕
48	11	24	耕作土下層	(9.4)	——	14.0	5.8	壺
49	11	24	耕作土下層	(14.0)	——	24.6	6.8	壺

第８章　　まとめにかえて

今回の発掘調査は、道路に並行して設定されたトレンチ状の調査区ながら多大の成果を得ることができた。しかし、鶴松遺跡を取り巻く状況は厳しいもので、次々に計画される小規模な開発により虫食い状態での発掘調査が続いている。調査成果から弥生時代の遺跡として「鶴松遺跡」の重要性はますます高まるばかりで、本格的な学術調査の必要性も考えなければならない時期にきていると思われる。特に、集落跡としては住居域や墓域、そして生産域である水田跡の検出など包括的な調査で「弥生のムラ」の全体像を復元できる数少ない遺跡である。一般の小規模発掘の連続で気が付いた時はすでに遺跡は無くなっていたのでは文化財保護行政も空しいものがあるといえる。

⑴今回の発掘調査の遺構は溝跡や土壙・柱穴跡が多く、その出土土器は弥生時代中期末から後期前半のものが中心であった。溝跡は環濠の一部と考えられるものがあり過去の調査との関連性が十分に考えられる資料である。

⑵調査区西側の溝跡００１は、昭和57年にＮＴＴ関連で発掘調査された場所の南側で検出された大溝との関連が注目されるであろう。

⑶溝跡００２と溝跡００５は平成８年度の県道北側の歩道設置工事に伴う発掘調査により検出された溝跡と対比される。これらの溝跡は南にいくにしたがってその流路を西に変えて、昭和57年にＮＴＴ関連で発掘調査された南地区の重複する溝跡に向かうものと思われる。今後はこれら３地点の溝跡出土遺物の検討が必要になってくる。

⑷住居跡については昭和47年の鶴松遺跡第１次調査にて検出されており、この一群の住居跡との関連が注目される。

⑸焼土住居跡はその焼土の広がりから炉跡ではなく火災住居の可能性がある。

最後に、突発的な緊急事態により計画された発掘ではあったが今回の調査にあたり静岡県袋井土木事務所工事第一課のみなさんには埋蔵文化財の重要性について深いご理解をいただき、発掘調査に対しては全面的な協力を申し出ていただいた。改めて、ここに記して感謝の意を表します。

（袋井市教育委員会　永　井　義　博）

（参考文献・引用文献の一部）

袋井市役所　1983　『袋井市史』
－通史編－

袋井市教育委員会　1987　『鶴松遺跡Ⅱ』
－日本電信電話公社山科無線中継所建設に伴う発掘調査報告書－

袋井市教育委員会　1983　『鶴松遺跡Ⅲ』
－中部電力株式会社地中配線工事に伴う緊急発掘調査概報－

袋井市教育委員会　1991　『鶴松遺跡Ⅳ』
－延久地区農村基盤総合整備事業（集落型）施行に伴う
発掘調査報告書－

袋井市教育委員会　1991　『堀越ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書』

袋井市教育委員会　1991　『袋井市鶴田Ⅱ遺跡』
－サンレンタル株式会社建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－

袋井市教育委員会　1992　『鶴松遺跡Ⅴ』
－株式会社ジュピタ住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書－

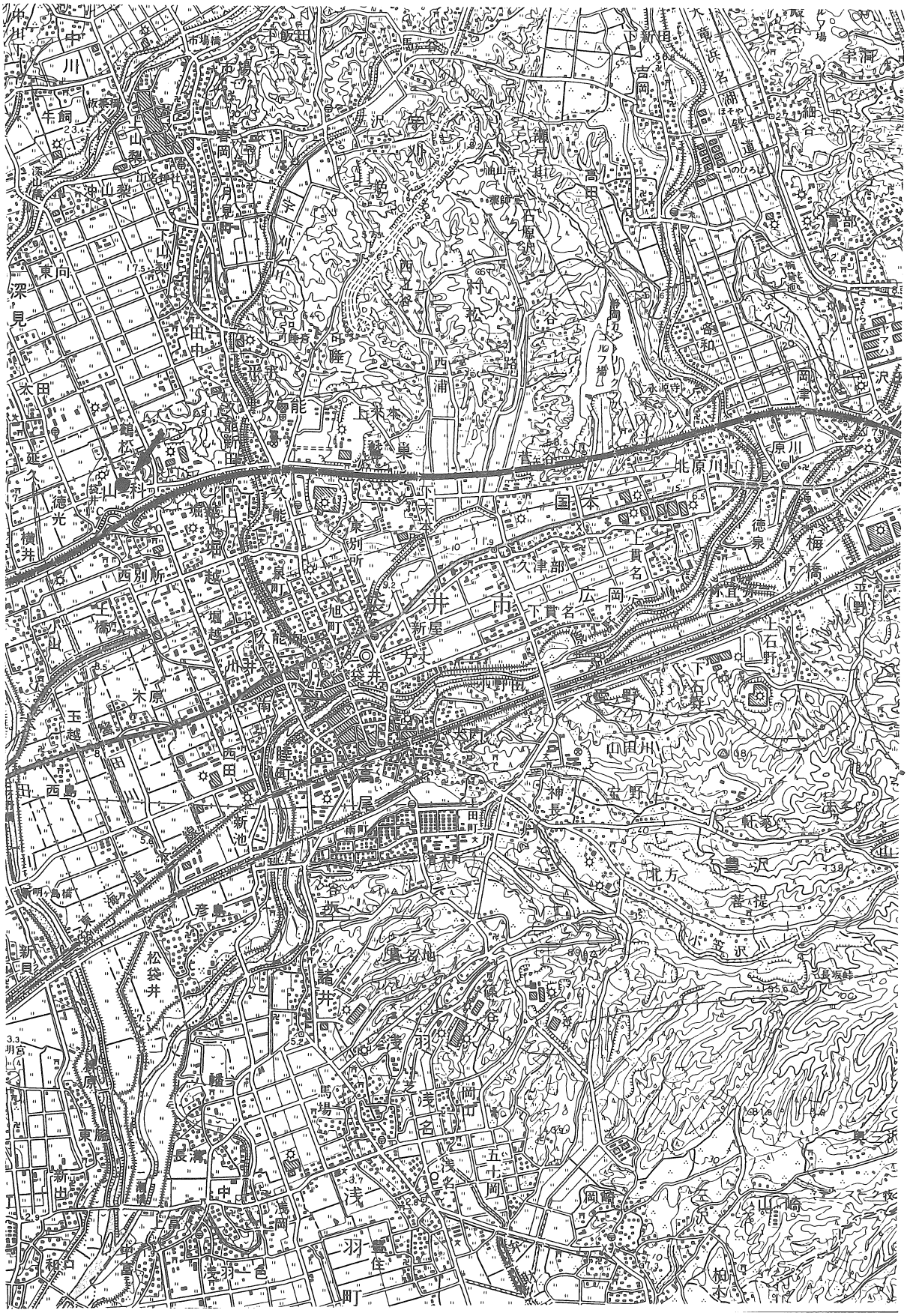
袋井市教育委員会　1993　『鶴松遺跡Ⅵ』
－(主)浜北袋井線特定交通安全施設１種工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書－

袋井市教育委員会　1992　『鶴松遺跡Ⅶ』
－中部電力㈱77KV磐田西掛川線一部増強工事に伴う
緊急発掘調査報告書－

袋井市教育委員会　1997　『鶴松遺跡Ⅷ』
－平成８年度　アパート建設に伴う発掘調査報告書－

岩本貴　1997　「鶴松遺跡出土土器について」『研究紀要　第５号』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所

挿　　図



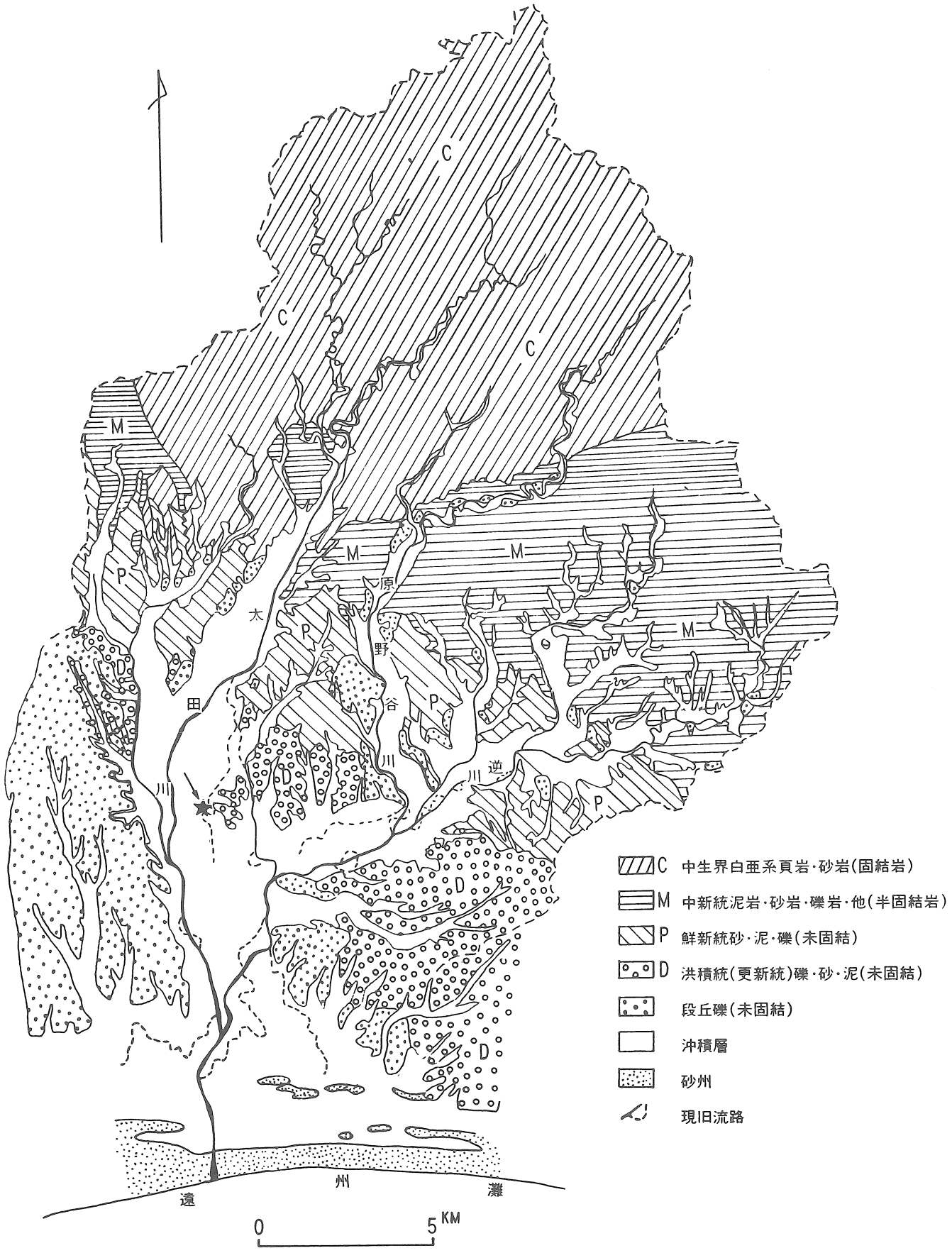
第１図　鶴松遺跡位置図（1／50,000）



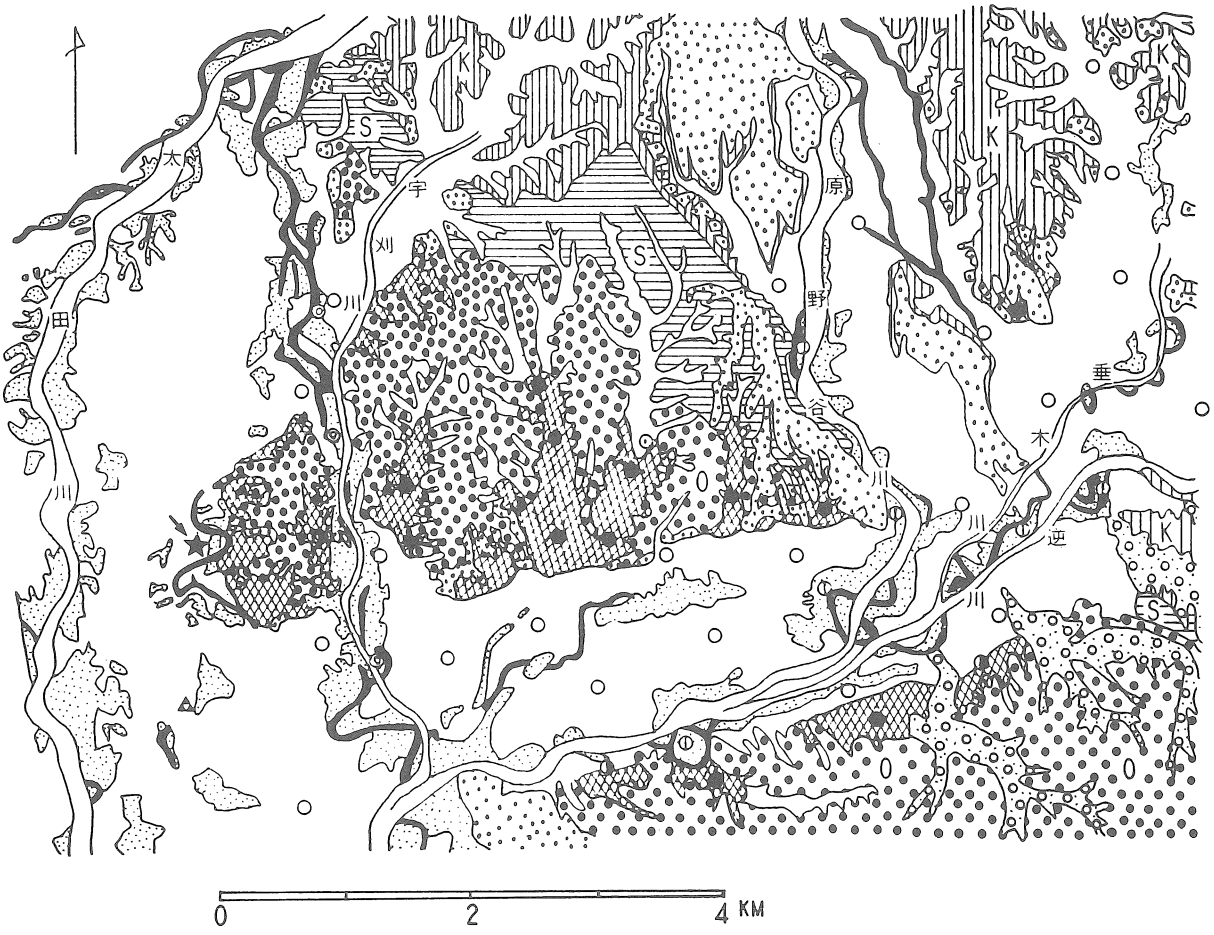
第２図　鶴松遺跡発掘調査の位置（1／2,500）



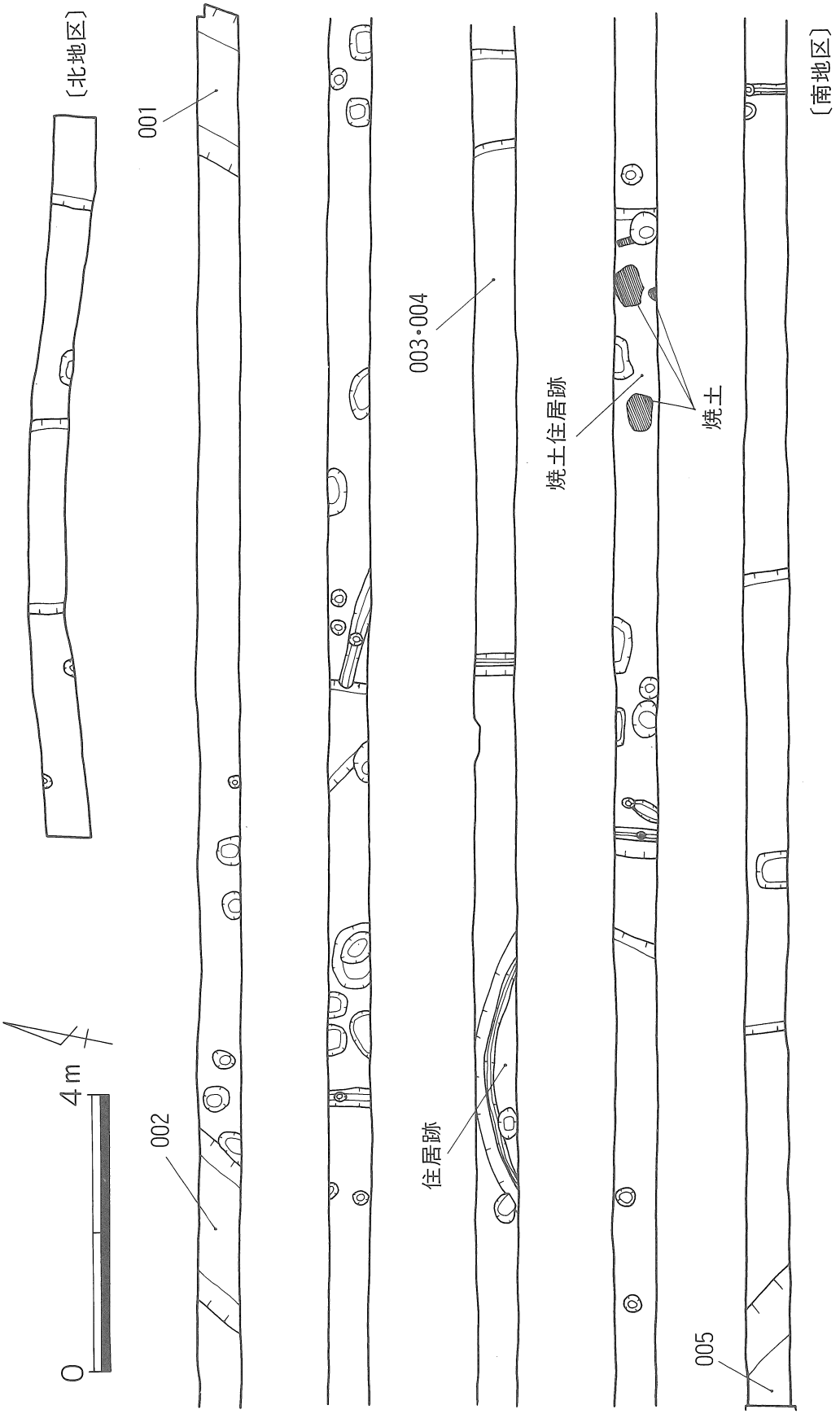
第３図　旧地形でみる鶴松遺跡の位置（陸地測量部地図より）



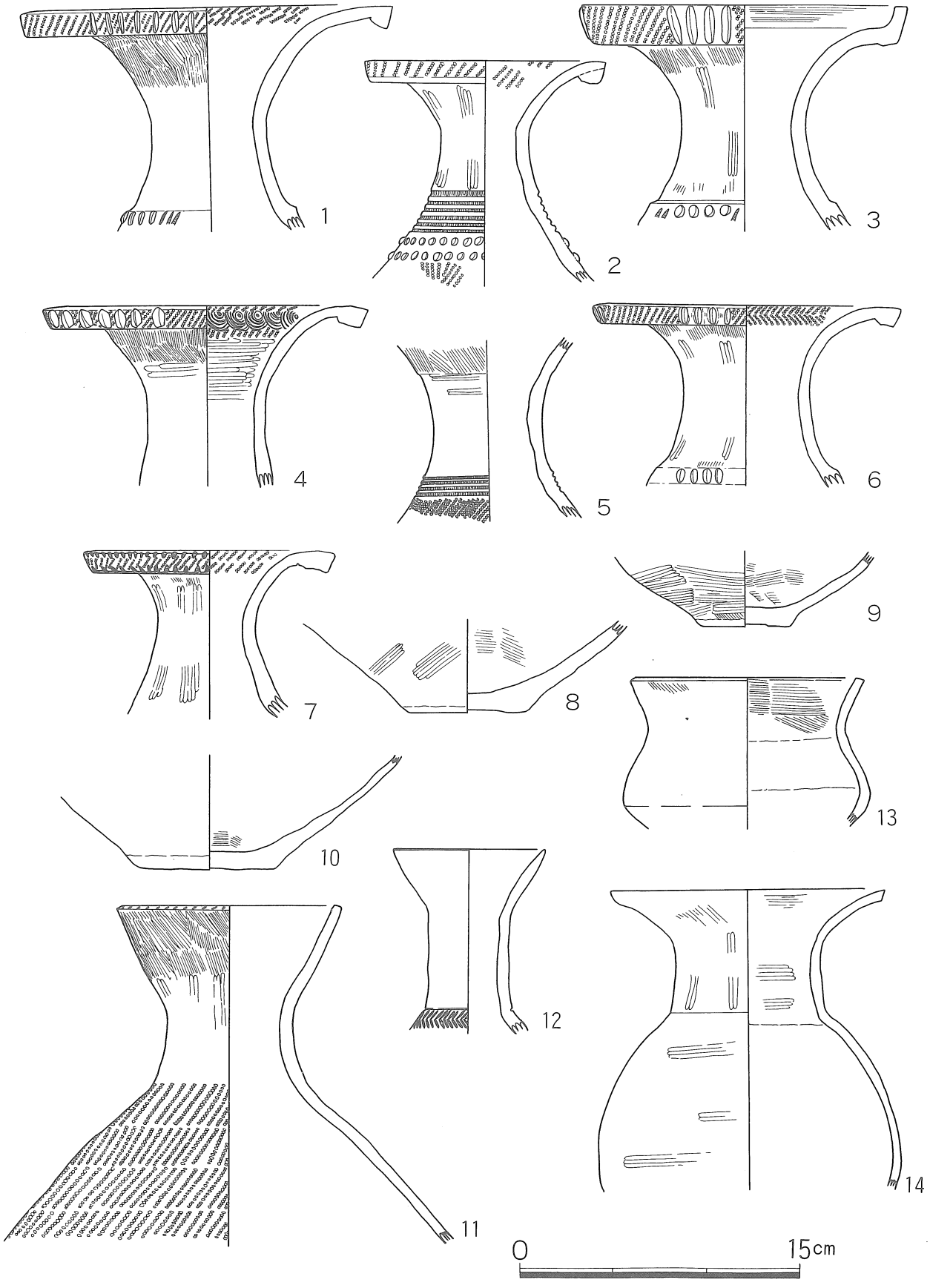
第4図　太田川・原野谷川流域の地形・地質図（加藤1985より）



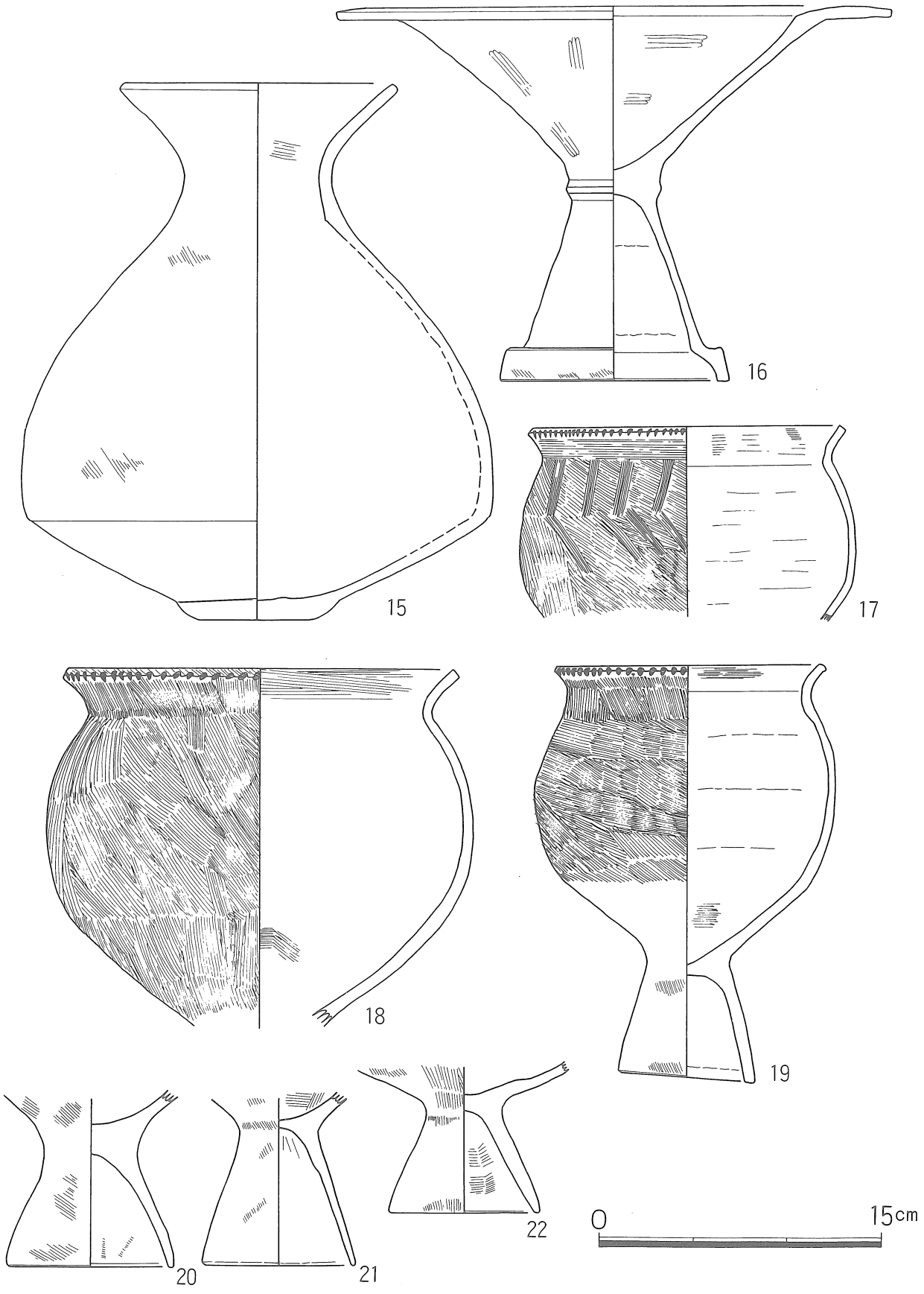
第５図　鶴松遺跡周辺の地形・地質図（加藤1985より）



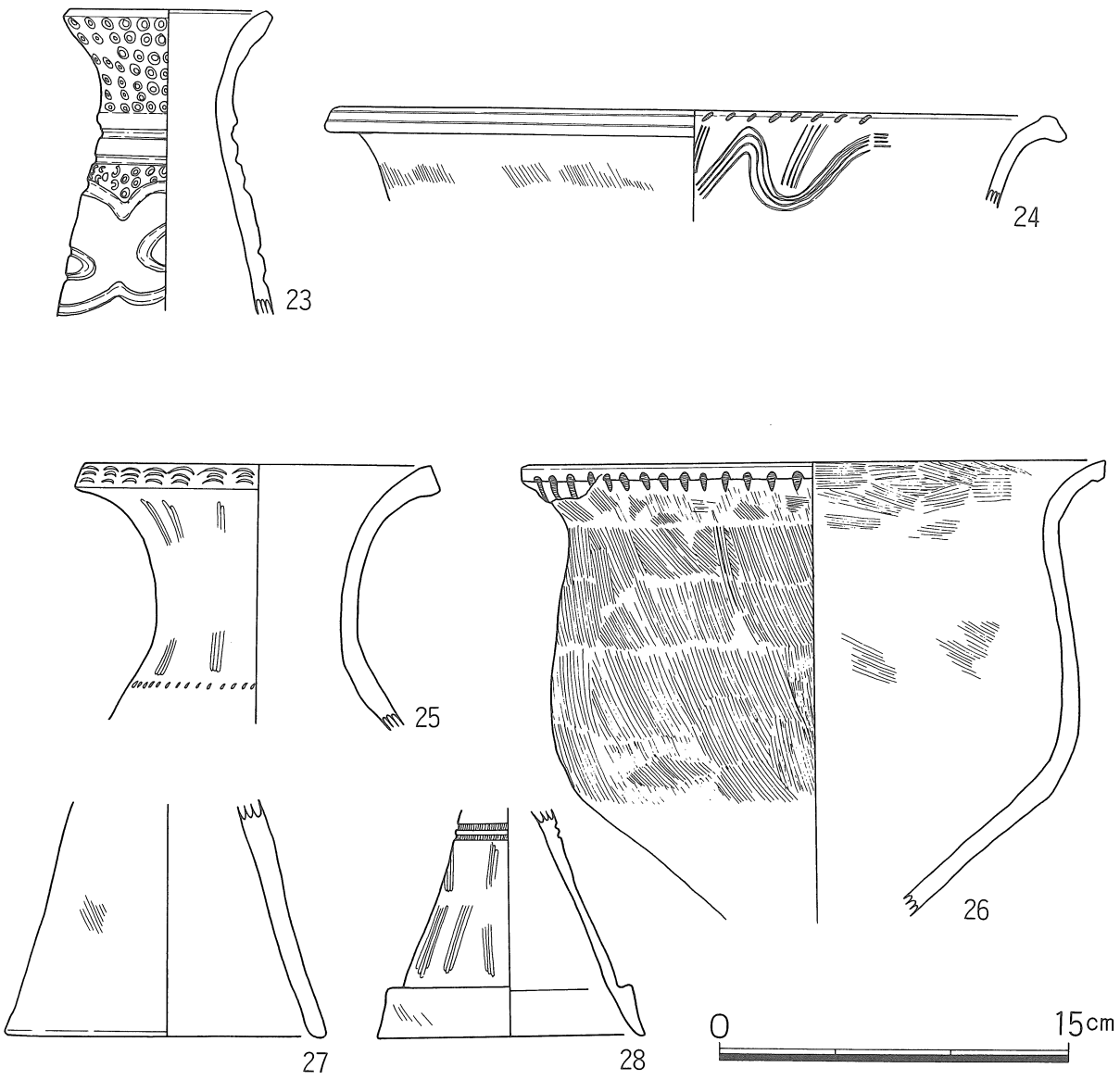
第6図　発掘調査区全体図（北・南地区）



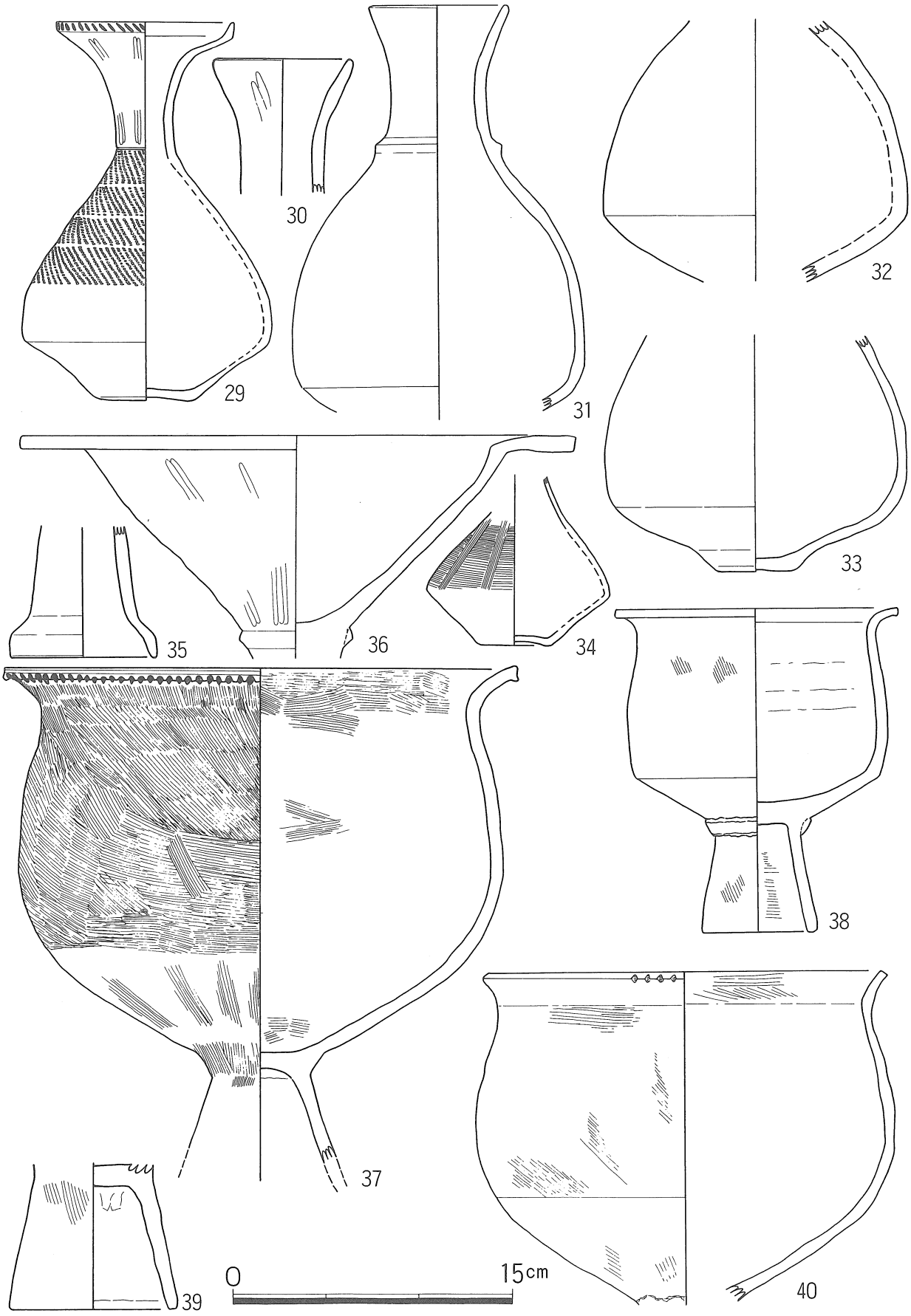
第７図　出土遺物実測図（１～14＝００１）



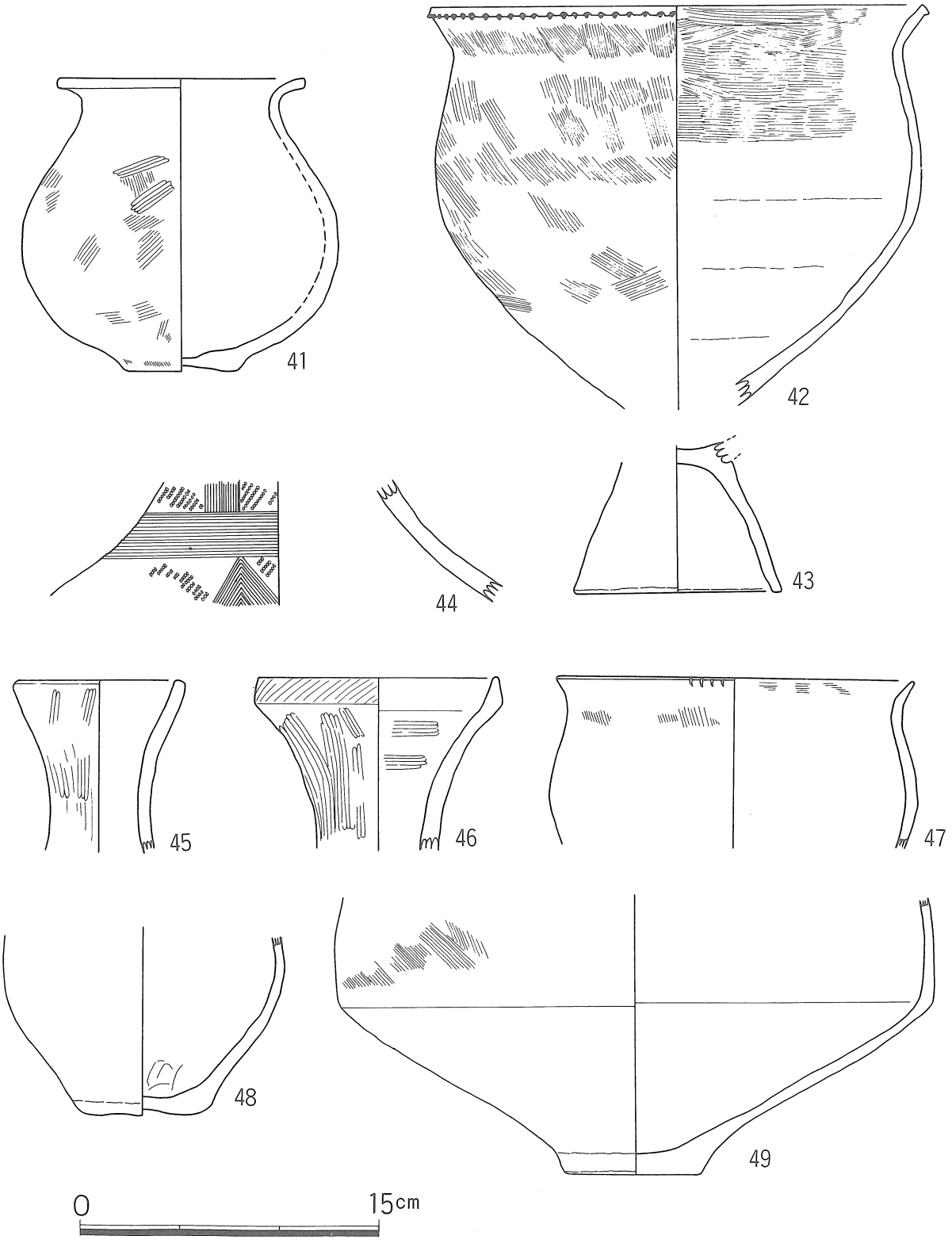
第８図　出土遺物実測図（15～22＝００１）



第９図　出土遺物実測図（23・24＝００２，25～28＝００３）



第10図　出土遺物実測図（29～40＝００４）



第11図　出土遺物実測図（41～43＝００５，44＝焼土住居跡，45～49＝耕作土下層）

写真図版



(1)　調査完了写真（東より）



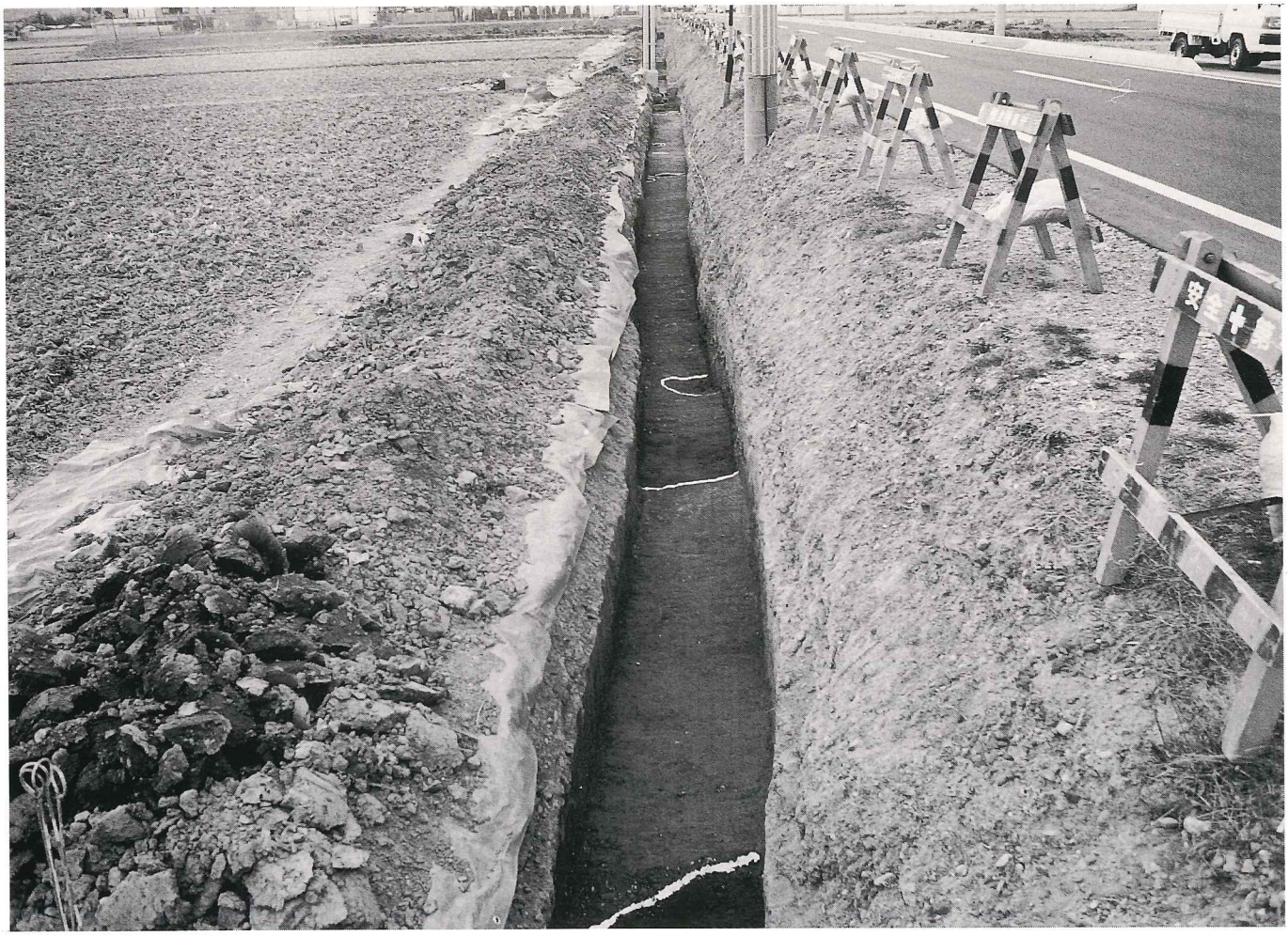
(1)　発掘調査前の状況（西より）



(2)　調査前の土側溝の状況



(1)　発掘調査完了写真（西より）



(2)　発掘調査完了写真（東より）



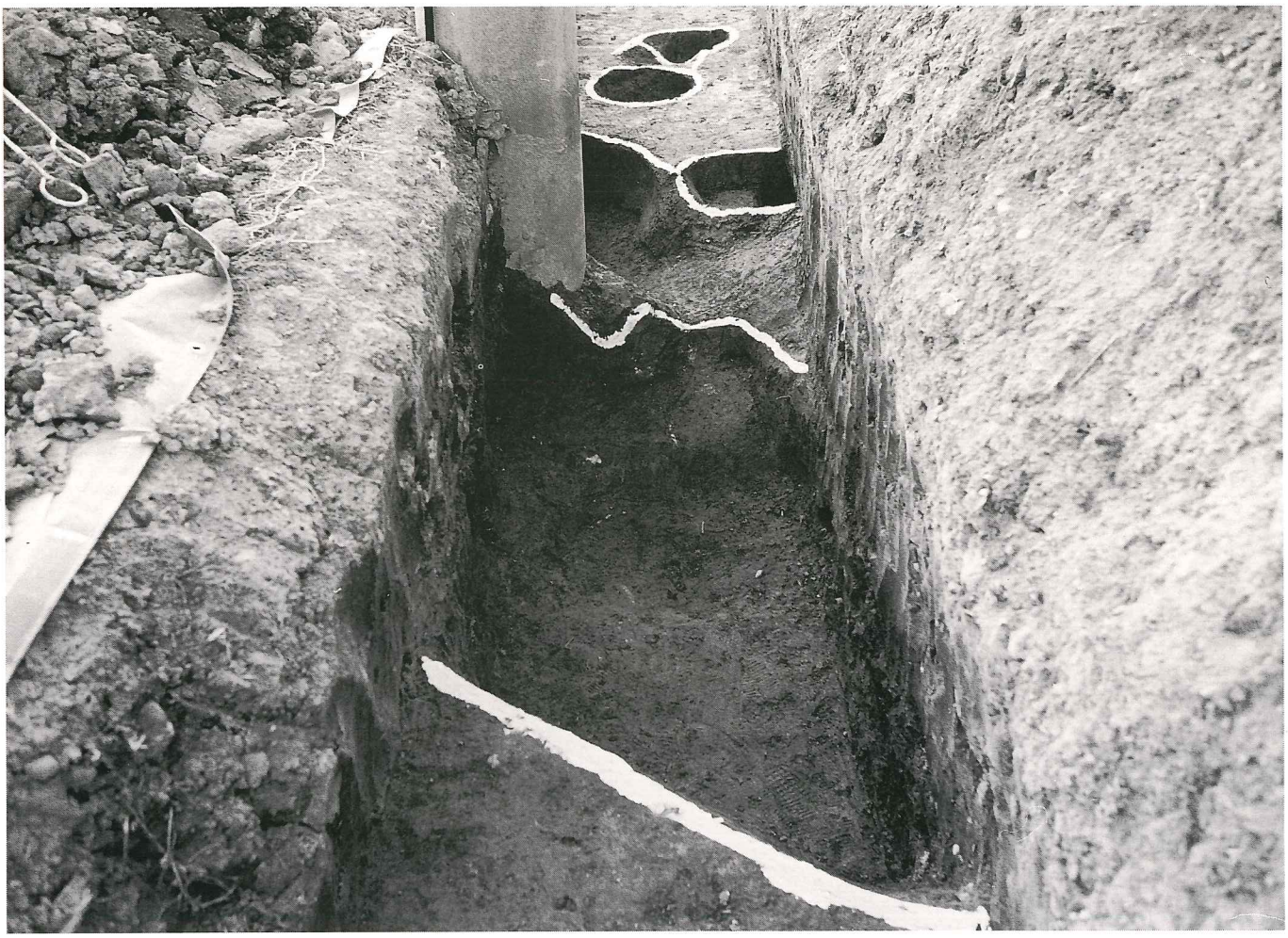
(1)　発掘作業の状況（焼土住居跡付近）



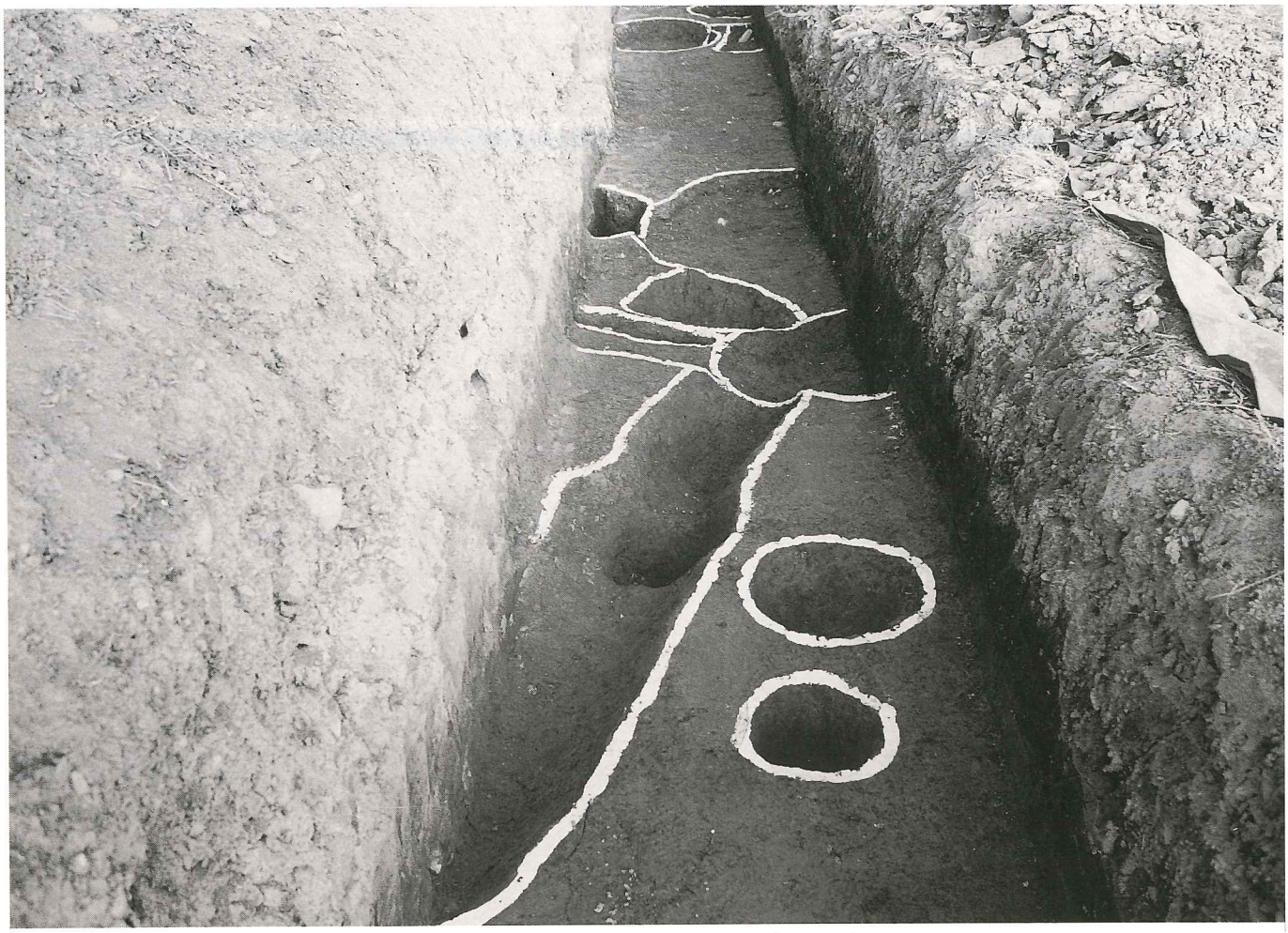
(2)　発掘作業の状況（溝跡００１付近）



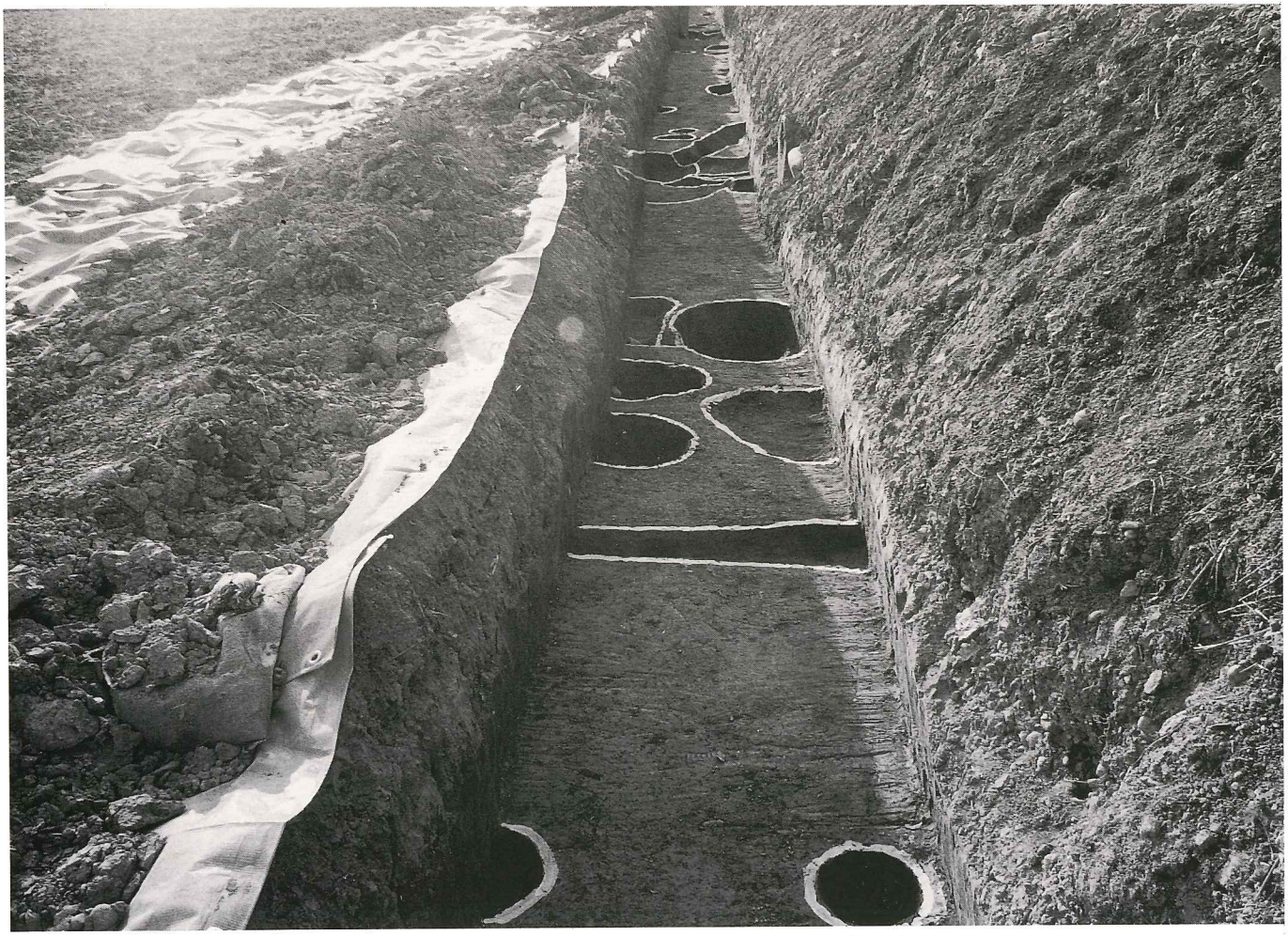
(1)　溝跡００１完掘写真（東より）



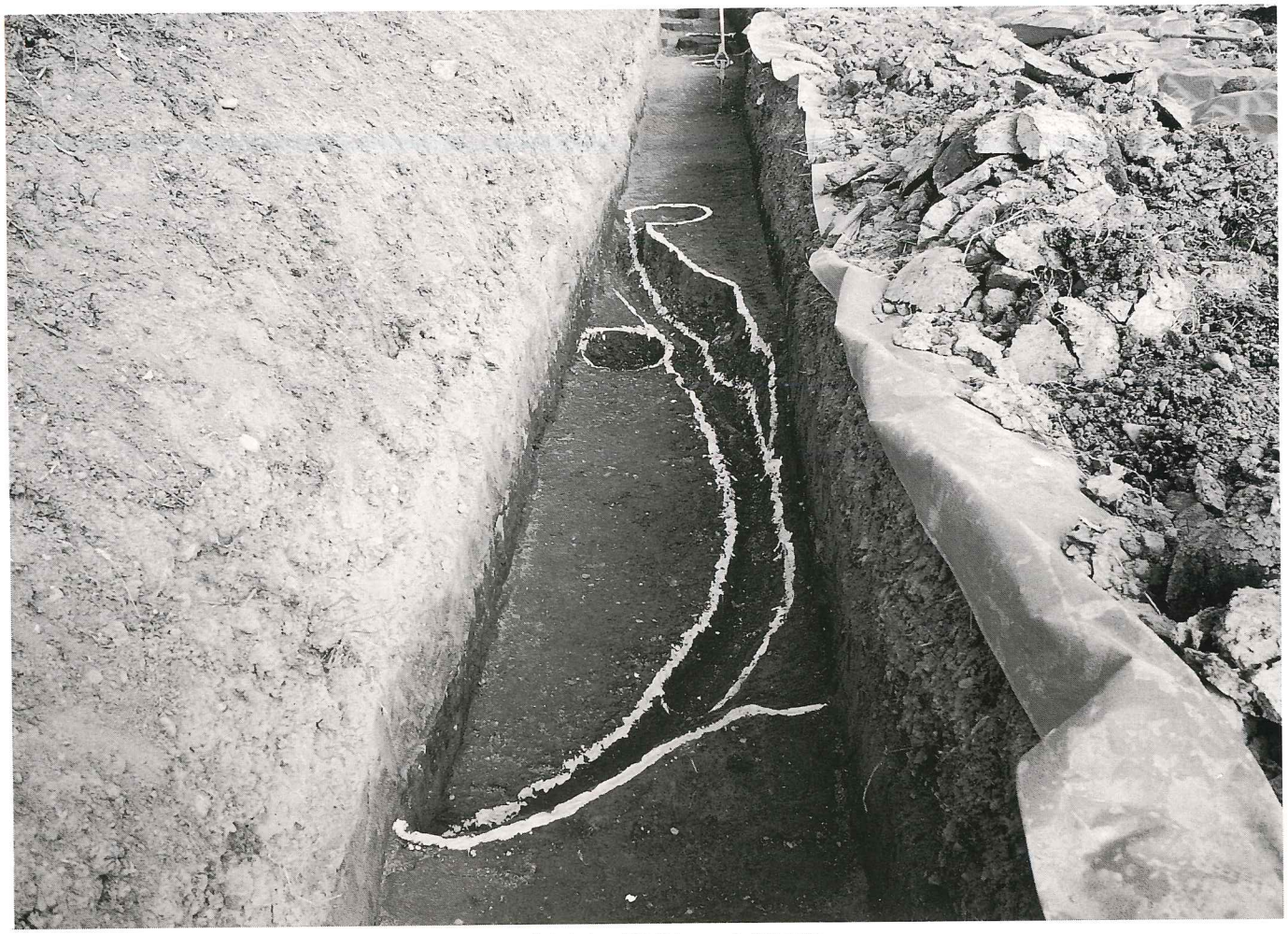
(2)　溝跡００２完掘写真（東より）



(1)　溝跡・柱穴群の完掘写真（東より）



(2)　溝跡・柱穴群の完掘写真（西より）



(1)　住居跡（部分）の完掘写真



(2)　焼土の検出状況



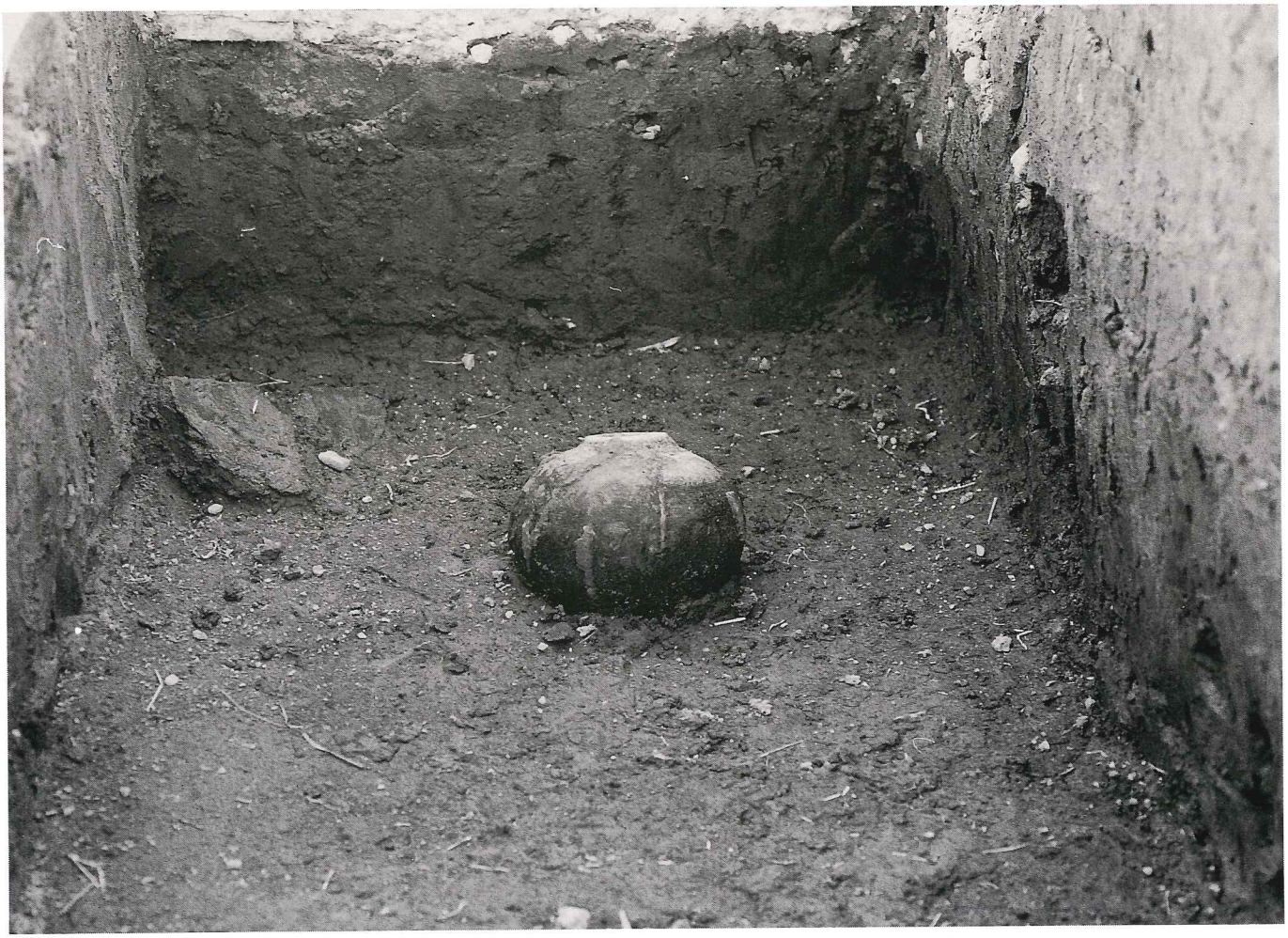
(1)　土器出土の状況（００４）



(2)　土器出土の状況（００４）



(1)　土器出土の状況（００３）



(2)　土器出土の状況（００５）



(1)　北地区の発掘前の状況（東より）



(2)　北地区・発掘調査開始（東より）



(1)　北地区完掘写真（西より）



(2)　北地区完掘写真（東より）



(1)　工事排土内の土器確認作業



(2)　工事排土内の土器確認作業



1（001）



2（001）



3（001）



4（001）



5（001）



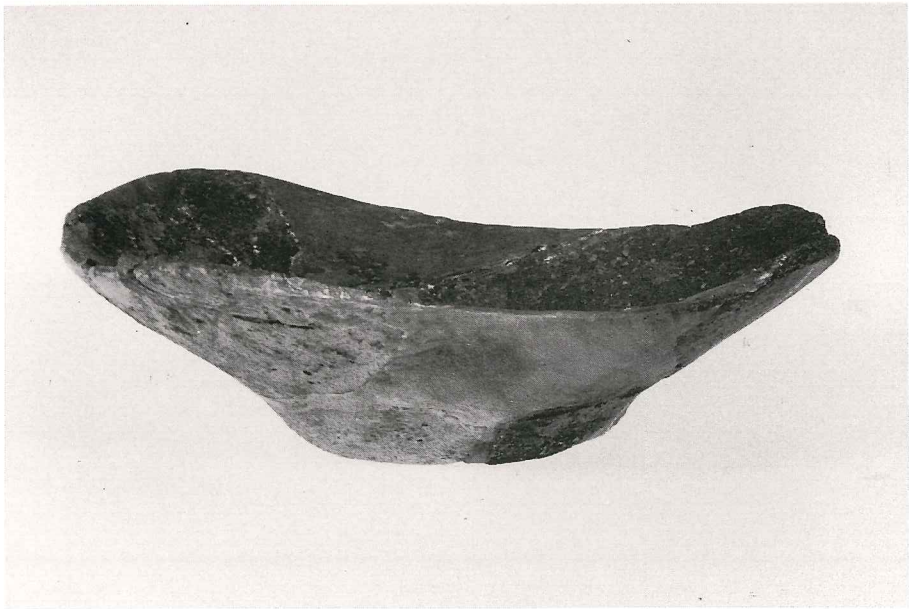
6（001）



7（001）



8（001）



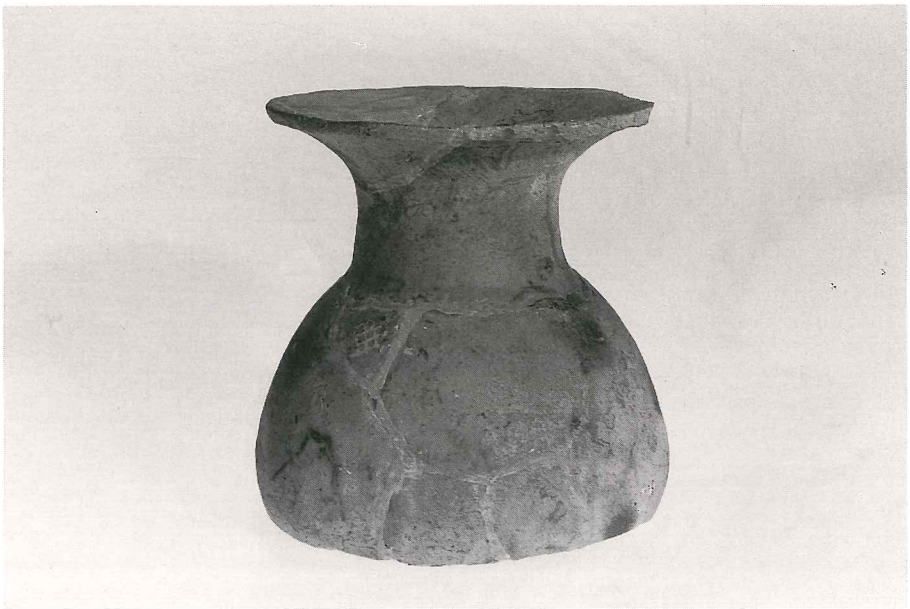
9（001）



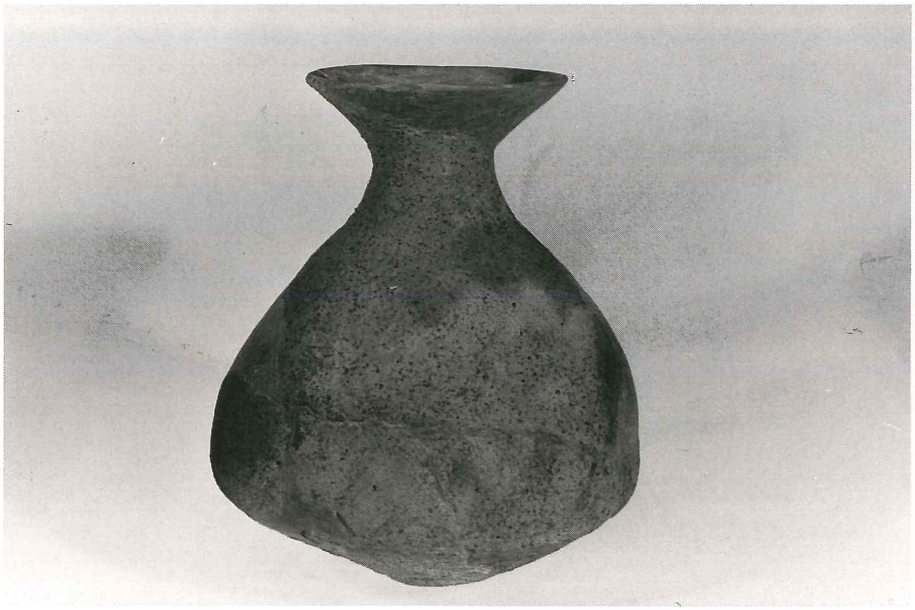
11（００１）



12（００１）



14（００１）



15（００１）



16（００１）



19（００１）



20（００１）



21（００１）



22（００１）



25（００３）



26（００３）



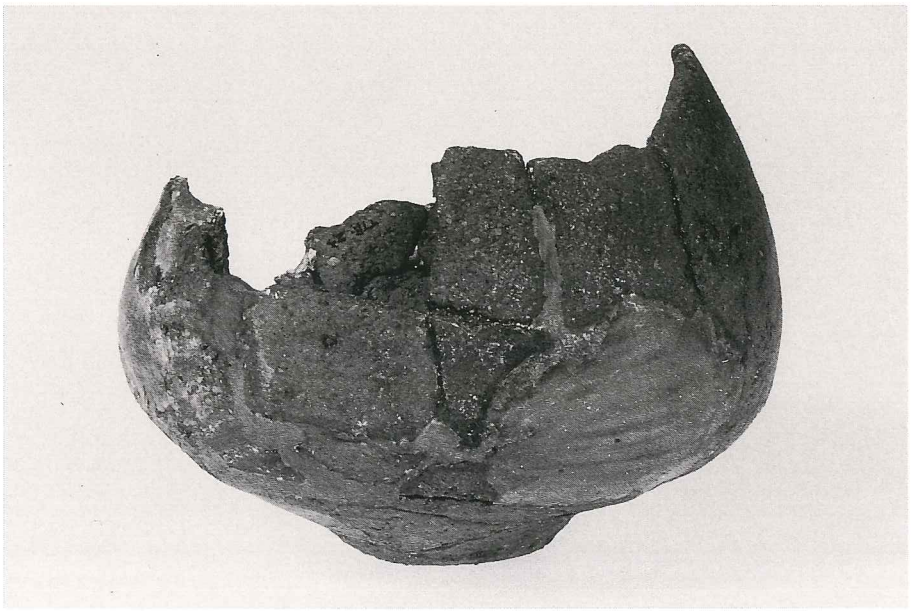
29（００４）



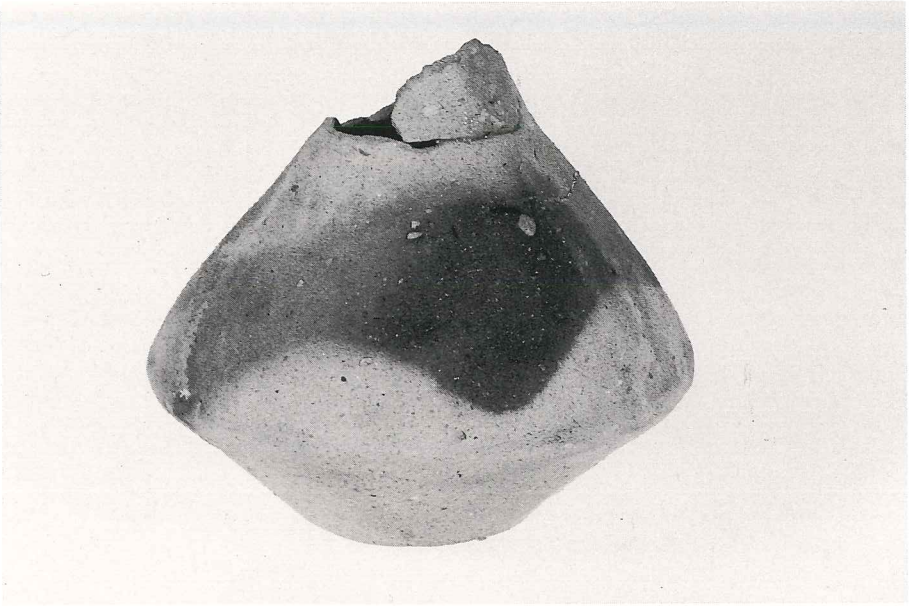
31（004）



32（004）



33（004）



34（００４）



35（００４）



36（００４）



37（００４）



38（００４）



39（００４）



40（004）



41（005）



42（005）



46（耕作土下層）



48（耕作土下層）



49（耕作土下層）

報告書抄録

ふりがな	つるまつ いせき
書名	鶴松遺跡 Ⅸ
副書名	(主)浜北袋井線県単交通安全施設1種工事に伴う発掘調査報告書
編集者名	永井義博
編集機関	袋井市教育委員会
所在地	〒437-8666　静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1　TEL0538-44-3141
発行年月日	1998年3月10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (－m²)	調査原因
鶴松遺跡 (つるまつ いせき)	静岡県袋井市 (しずおかけんふくろいし) 山科・延久 (やましな・のべひさ)	22216	140	34° 45′ 34″	137° 54′ 27″	19961025 ↓ 19970320	100m²	県道用排水路設置

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鶴松遺跡Ⅸ (つるまついせき)	集落跡	弥生時代	住居跡、溝跡 柱穴跡、土壙	弥生時代 木製品	弥生時代中期～後期の集落跡として著名な鶴松遺跡の調査。遺跡の中央を県道に沿って東西方向に全長100m、幅60cmでトレンチ状に調査したため住居跡、濠跡、柱穴跡など多彩な遺構と多数の土器を検出する。

鶴松遺跡Ⅸ

(主)浜北袋井線県単交通安全施設
1種工事に伴う発掘調査報告書

1998年3月

編集　静岡県袋井市新屋1－1－1
袋井市教育委員会
☎0538－44－3141

印刷　静岡県榛原郡吉田町片岡2210
松本印刷株式会社